

1 臨床看護学 基本的な知識

1.1 臨床看護学概論

- 愛玩動物看護師法(所管:)
- ・対象動物:
- ・愛玩動物看護師には、国家試験合格後、[]に登録されて免状が発行
→苗字や住所など登録内容に変更があった際は[]日以内に届出
- ・[]の下行う、投薬、採血、マイクロチップの装着、カテーテル採尿などを実施可能
- ※エマージェンシー対応の際はあらかじめ決められた手順書に従い行うのであれば獣医師の個別指示は必ずしも必要ではない

(1)動物看護過程

- ① []…情報を収集する
- ② []…集めた情報から問題点を抽出する
- ③ []…問題点を解決する具体的な計画を立てる
- ④ []…具体的な計画に沿って実施する
- ⑤ []…実施した内容が計画通りできたか、目的を達成できたか評価する

(2)クライアントエデュケーション

- 動物看護師として飼い主からいろいろな相談を受けたり指導したりすること
- ※この際「聴く力」が重要になる
- []…単に聞くだけでなく、相手が考えていること、感じていることなどをくみ取ろうと積極的な聴く姿勢のこと
- []…相手の立場に立って考え、理解・尊重し受け入れること
- []…受け取った情報を自分の言葉で表現し、相手に確認して共通認識させること

(3)臨床看護における技術

① 身体検査/バイタルサイン

★バイタルサインとは:[], [], []
[], []

② 聴診…聴診器を使い、呼吸音と心音を聴取する

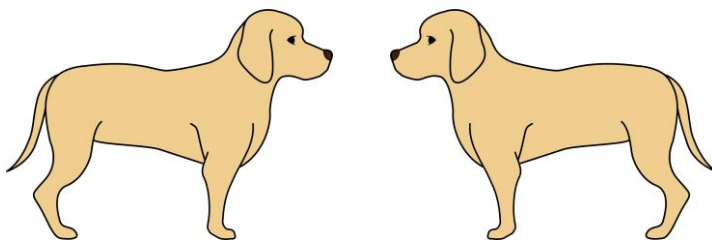


表1 犬と猫のバイタルパラメータ

体温(°C)	正常	38~39	
	低体温	37以下	
	高体温	40以上	
心拍数(回/分)	犬(25kg未満)	正常値	90~160
		徐脈	<70
	犬(25kg以上)	正常値	70~100
		頻脈	>160
	猫	正常値	150~210
		頻脈	>250
呼吸数(回/分)	犬	正常値	8~20
		徐呼吸	<8
		頻呼吸	>20
	猫	正常値	8~30
		徐呼吸	<8
		頻呼吸	>30
血圧(mmHg)	収縮期	100~150 (160以上は高血圧)	
	拡張期	60~110 (<60は低血圧)	
	平均動脈圧	80~120	
粘膜の色調	正常	ピンク	
異常	蒼白、茶色、黄色		
毛細血管再充満時間/CRT(秒)	正常	約1秒	
異常	<1, ≥2		
尿量(mL/kg/時)	正常	1~2	
	異常	<1	

バイタルパラメータは個体差があるため、各個体の平均値を把握しておくことが良い。

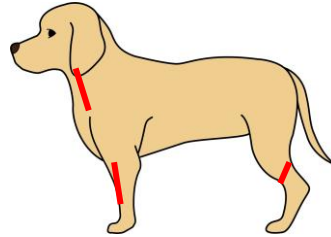
1 臨床看護学 基本的な知識

1.1 臨床看護学概論

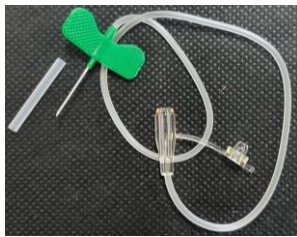
(3) 臨床看護における技術

③ 注射/採血

★犬、猫の採血に適した血管…[]、[]、[]
※猫では内股の[]も使用する



各種注射針の表示→G(ゲージ)は数字が大きいほうが[]



④ 点滴(輸液療法)について

●目的

- ・[]、[]の補給
- ・[]
- ・酸塩基平衡の補正(pHの補正)
- ・栄養源の補給
- ・血管確保(薬物投与ルート of 確保・維持)

●点滴の種類

- []…生理食塩水、リンゲル液、乳酸リンゲル液
- []…5%ブドウ糖液
- [] → 血管内に輸液がとどまり循環血液量を増加させる

※輸液療法に関わる知識 … 「酸塩基平衡」

体液が酸性に傾く状態を[]、アルカリ性に傾く状態を[]という
原因として呼吸に関わるものを[]、代謝に関わるものを[]

1 臨床看護学 基本的な知識

1.1 臨床看護学概論

(3) 臨床看護における技術

⑤ 看護記録

看護記録をとる際は[]で記載すると効率よく記載できる

S:

O:

A:

P:

1.2 終末期にある動物の看護

- ・ []…終末期医療と訳される

→完治の見込みがない場合、治療そのものが動物に対して苦しみを与えるだけの場合は治療自体の是非を飼い主と一緒に考えるべきである

- ・ []…治療の見込みがないと分かった時点で、疾患の治療ではなく、「症状の緩和・環境の整備・維持療法」を行うこと

→この考えを踏襲して、病気の進行度関わらず苦痛を和らげることに焦点を当てた考え

= []

- ・ []…亡くなった後、生前の面影を可能な限り取り戻すとともに、体を清潔にし、感染症を予防するための処置をする

2 臨床検査学

2.1 血液検査

・採血後の血液は各種検査に対して適した処理を行う必要がある

- ①全血球計算…
- ②血液生化学検査…
- ③凝固系検査…
- ④「血清」を採取する…

・血液検査(生化学検査)による項目

- ①肝酵素(逸脱酵素)…肝臓が障害されると上昇する
→[]
- ②肝機能検査
→[]
- ③腎パネル
→[]
- ④膵臓の項目
→[]
- ⑤脂質代謝に関する項目
→[]

2.2 X線検査

・一般的には無麻酔で実施し、[]方向以上の撮影をする

・胸部は[]時、腹部は[]時に撮影する

・造影X線検査

①消化管造影→[]や[]を使用

・経口的に造影剤を投与して、経時的に何度か撮影を実施

※消化管穿孔が疑われる場合は[]は禁忌

②尿路造影→[]を使用(陰性造影剤として[]を使用することもある)

・静脈に投与して腎臓から尿管、膀胱に至る経路を造影する[]と

尿道からカテーテルなどを用いて膀胱へ造影剤を注入する[]がある

③脊髄造影→[]を使用

・造影剤を[]に注入する([]や[]からアプローチ)

2.3 超音波検査

・基本的には動物に対する侵襲性が[]

・心臓の検査をする際は心臓の活動との関係を見るため[]を装着する

・Bモード(基本の断面を描出)、Mモード(心臓の活動を経時的に見る)

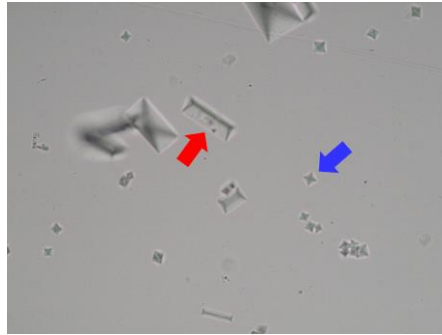
Dモード(ドプラ効果を利用して血流を描出する)



2 臨床検査学

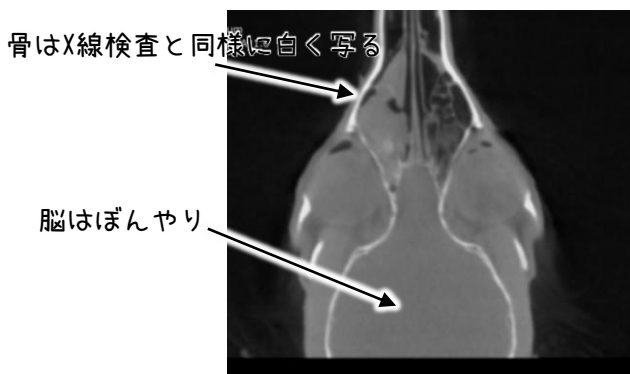
2.4 尿検査

- 尿の採取方法は以下の通り
 - []…簡便だが、細菌やゴミが混入する
 - []…膀胱を圧迫し排尿させてそれを採取する
 - []…尿道にカテーテルを挿入して採取、感染リスクあり
 - []…超音波ガイド下で針を膀胱に刺し採取する
- 尿検査の項目は[]と[]に分けられる

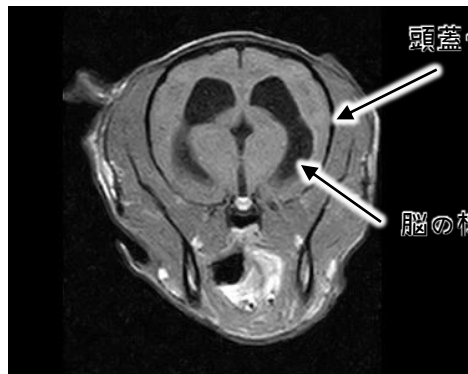


2.5 CT検査とMRI検査の違い

	CT検査	MRI検査
使用電磁波	X線	磁気・ラジオ波
X線被曝	あり	なし
撮影時間	数秒～数分	数分～数十分
骨の影響	あり	なし
造影剤	ヨード剤	ガドリニウム製剤
適応	全身スクリーニング 肺・骨格病変 腹部病変(造影剤使用)	脳・脊髄病変 ※骨に囲まれた器官の検査 腹部、筋肉、靭帯
※見分けのポイント	<ul style="list-style-type: none"> 骨格に囲まれた脳や脊髄は苦手 臓器の形などはしっかり見える 造影すると血管の走行はしっかり見える 	<ul style="list-style-type: none"> 脳や脊髄は内部の構造までしっかり見える 骨は描出しにくい



CT



MRI

頭蓋骨は描出されていない

脳の構造がしっかり描出